

出土の6及び7の紡錘車は、2コ1組で使用したかのごとくである。他の遺跡の擦文住居に伴う紡錘車の出土位置も多くは、土器の出土位置とは異なる事例が多いようである。これは、やはり住居内における作業空間の違いを示していよう。

詳細に亘る分析については、稿を改める所存である。多くの方々からの御批判並びに御教示を切願し、擱筆するものである。

(日本考古学会員)

### 参考文献

- 浦幌町教育委員会 1973 『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第1次発掘調査—』  
3頁～9頁
- 杉原莊介 1962 「紡錘車」 『日本考古学辞典』  
493頁 東京堂出版
- 藤本 強 1982 『擦文文化』 137頁～141頁  
教育社
- 八幡一郎 1968 「北海道の紡錘車について」 『北海道考古学』 第4輯 11頁～20頁 北海道考古学会

## 浦幌町で発見したチャシ2例

### 後藤秀彦

北海道内に所在するチャシ跡の分布調査は近年精力的に進められ、ここ数年のうちに発見され、周知されたチャシ跡も少なくない。筆者らも、主に十勝管内を中心として鋭意調査に当ってきたところであるが、最近浦幌町内で2基のチャシ跡を発見する機会に恵まれたので、ここに報告する次第である。

なお、このチャシ跡発見に当たり、現地案内をお願いした斎藤兵一郎および大坂千代人氏に心からお礼申し上げるとともに、平素からご指導賜っている石橋次雄・澤四郎の両先生に感謝したい。また、この調査に同行して下さった厚内公民館主任佐藤芳雄氏にもお礼申し上げる。

#### 1. アツナイチャシ跡

浦幌町字厚内1番地および9番地に所在する。筆者は、前記した佐藤芳雄氏の通報により現地を尋ね斎藤兵一郎氏の案内により確認することができた。1980年秋のことである。その後、翌1981年5月北海道教育委員会の「埋蔵文化財包蔵地分布調査」(調査者:高橋和樹・長沼孝・田才雅彦)の際、同行し、再びこのチャシを踏査した。

最初に現地を案内してくれた斎藤兵一郎氏によれば、昭和初期に長男誕生の際に植林したときに発見したものと言い、その際「これはチャシだ」と確信したという。

チャシは、白糠丘陵の最西端部に所在し、西面

したいくつかの急峻な屋根のうちのひとつに築造されている。標高は約40m、比高は約30mである。チャシはこの屋根を真上に昇った、やや傾斜のある部分に築かれ、尾根部を切断するように長さ20m、幅6～7m、深さ4mの壕が構築されている。主体部は22m×12mで、その中に2つの竪穴様のくぼみが残されている。壕からはチャシの側面および前面に浅い壕又はテラス状の遺構が残され、その平面形は丘先式のチャシに、側面形は丘頂式のように見える。

このチャシからの眺望は良く、左手に太平洋を臨み、眼下には厚内川が右手から左手に向かって流れている。

#### 2. チプネオコッペチャシ跡

浦幌町字オコッペ76番地に所在する。1981年5月の「埋蔵文化財包蔵地分布調査」の際、通報してくれた大坂千代人氏の案内で現地踏査したものである。

チャシ跡は、太平洋から直線で2.5km奥地へ入ったチプネオコッペ川にチプネ二の沢川が合流する地点に築造されている。この両河川とも小流であるが、周囲の山が急峻なためひとたび雨が降ると、一時に水量が増し、時には流路を変更することもある。

チャシはこの両河川の合流点に狭まれるようにして所在している半独立の平面橙円形の小丘上に



PL. 1 アツナイチャシ跡の前面テラス部分



PL. 2 チフネオコッペチャシ跡

2つの壕をもって築かれている。標高は約20m、比高は10m強である。この半独立の小丘の頂上附近に築かれた壕は、前方のものが幅3.50m、後方のものが2.50mあり、各々後方部に湾曲している。したがって、このチャシの縦断面はお供山型となり、横断面は一つの小山状となる。このチャシの後方は、馬の背状の細い尾根となって丘陵部へと連結している。

### 3.まとめにかえて

以上、2つのチャシ跡について記してきたが、この付近にはこのほかにオタフンベチャシ跡と霧止山チャシ跡の2例がある。これらのチャシ跡はそれぞれ独特なものをもち、又典型的なチャシの形態を示しているが、かつて筆者はチャシの形態についてごく簡単に触れたことがあったが(後藤、1982)、これらのチャシについてもそれぞれ次の「型」を与えた。

オタフンベチャシ跡	II a
チフネオコッペチャシ跡	II b
アツナイチャシ跡	III b
霧止山チャシ跡	III c

オタフンベチャシは独立丘・半独立丘の肩部に周壕をもつ例として、チフネオコッペチャシは肩部の短軸方向に2本の壕のあるものの例として、アツナイチャシは舌状台地上の壕が側面・前面にまでまわっている例として、霧止山チャシは舌状台地の短軸方向に壕が2本あるものの例として挙げたが、前二者は河野広道(1958)の丘頂式に、後二者は先丘式に分類されるものである。しかし、チフネオコッペチャシの例は、周壕のうち長辺の

壕が意図的に省略されているものであり、アツナイチャシは丘先式の形態を示しながらも壕・テラスが側面・前面にまで及びオタフンベチャシと同様の意識を残しているものである。このアツナイチャシと同様の形態をもつ例に千歳市シュトクンネチャシ(福田、1980)があるが、他のいわゆる「丘先式チャシ」の中でも、側面および前面の壕・テラス部分が崩落して、単なる丘先式チャシ(筆者のIII d型)に見えるものもあると予想される。こうした意味合いから考えて、ここに報告した両チャシ跡は、保存が良好なため築造時又は廃棄時のチャシの様相をよく残しているものと看取される。

なお、型の分類については前述の拙稿を参照願いたい。

(浦幌町郷土博物館学芸員)

### 引用文献

- 河野広道(1958)「先史時代篇」『網走市史』上、  
後藤秀彦(1982)「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報告』19  
福田友之(1980)「シュトクンネのチャシ」『日本城郭大系』1 北海道・沖縄

1983年3月10日	印 刷
1983年3月31日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 家 村 克 行	
発 行 所 浦幌町郷土博物館(089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社(080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	